【原著】 大学入試研究ジャーナル第 34 号，44-51，2024

高校時の高大連携活動に対する価値評定と大学生活の認識との関連
――利用した入試区分による検討――

橘 春菜，永野 拓矢，寺嶌 裕登，石井 秀宗（名古屋大学）

本研究では，高校時の高大連携活動の参加経験状況と，高大連携活動に対する価値評定と大学生活の認識との関連について，大学生を対象にオンライン調査を実施し検討した。結果，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者は一般選抜のみの利用者と比べて高大連携活動への参加率が高いこと，調査参加者の多くが大学見学とオープンキャンパスに参加しており，大学の研究に携わる活動への参加者は相対的に少ないこと，偏相関分析の結果，参加した活動に対して入試や進学後の学びへの有用性を感じる程，その活動が進路選択や大学生活に影響したと認識し，活動のおもしろさに関わる価値づけが高い程，大学での主体的な学習態度と結びつくことが示された。

キーワード：高大連携活動，参加経験状況，価値評定，大学生活の認識

1 はじめに

1.1 高大連携活動の展開

中央教育審議会答申（1999）では，初等中等教育と高等教育の接続にあたり，高校教育から大学教育への円滑な移行という観点から，両者の教育上の連携を拡大し，入学者選抜の在り方を改善することの重要性が述べられた。以降，高等学校と大学とが相互に理解を深め，連携して生徒の能力や関心を促す取り組みが様々に展開されてきた。中央教育審議会答申（2016）では，高等学校や生徒の特性を踏まえ，大学等の専門機関において実施する就業体験活動（アカデミック・インターンシップ）を充実することについて言及された。これに対応して，「中学校・高等学校キャリア教育の手引き」（文部科学省, 2023）では，生徒の興味関心に応じた分野の大学研究室で研究活動体験を行うことで，自身の将来を考えることを目的としたアカデミック・インターンシップの事例が取り上げられている。こうした高大連携を支援する事業（たとえば，スーパーサイエンスハイスクール：SSH 等）も全国的に展開され，従来に比べて多くの生徒が高大連携活動に参加する機会を得るようになってきた。

近年の高大連携活動に関する先行研究では，多様な取組とその効果が示されている。たとえば，継続・育成型カリキュラムの高大連携活動を通じた高校生の進路意識の変容と効果（西郡ほか，2018），高大連携探究プロジェクトを通じた志願者の育成と大学入学者選抜の開発の可能性（大久保ほか, 2023），医学科志望者を対象とした数日間の体験授業を通じた高校生の進学意識，医学・医療への意識，動機づけの変化（山田ほか, 2023），講演型の高大連携活動における大学生のメッセージから受けた印象が高校生の意欲等に与える影響（大野ほか, 2021），コロナ禍のオンライン方式による高大連携活動の効果（板倉ほか, 2023）等である。西郡（2015）は，キャリア教育の観点から高大連携活動（出前講義）の効果を検討し，講義で得た大学の学びや研究に対する新鮮な発見や驚きが大学進学に向けた学習意欲を喚起する大きな要因となること等を示した。

生徒が将来を考える上で効果的な高大連携活動を探るため，生徒が参加した活動から何を得て，その活動をどのように価値づけ，将来の生き方や進路選択に結びつけていくか，という視点から検討を蓄積することが重要である。

1.2 高大連携活動に対する価値と大学生活の認識との関連

学習者が学習課題をどのように価値づけ，自律的な学習に結びつけるかについて，動機づけの観点から様々な検討が進められている。Eccles and Wigfield（1985）は，学習者がある課題に取り組もうとする価値的な側面を課題価値として概念化し，興味価値，利用価値，獲得価値の 3 つに整理した。伊田（2001）は，さらに利用価値と獲得価値を精緻化し，次の 5 つの課題価値に分類した。興味価値は課題の内容の楽しさや満足感を指す。実践的利用価値は課題内容の職業実践（希望する進路先）における有用性を指す。制度的利用価値は進学や就職試験を突破するための有用性を指す。公的獲得価値は課題の遂行が他者からみて望ましい（と本人が考える）自己概念の獲得につながることを意味する。私的獲得価値は課題の遂行が自分自身が

望ましいと考える自己概念の獲得につながることを指す。本研究では，これらの５つの課題価値の捉え方を援用し，高大連携活動に対して生徒がどのような価値を求め，それが後の進路選択や大学生活における主体的な学びや満足感とどのように関連するかを検討する。

1.3 目的

本研究では，（1）高校時の高大連携活動の参加経験状況を把握するとともに，（2）最も印象に残っている高大連携活動に対する価値評定と，現在の大学生活の認識（進路選択・大学生活への影響，大学における主体的な学習態度，大学生活満足度）との関連について検討することを目的とする。

2 方法

2.1 調査対象

2023 年 2 月に，インターネット調査会社の全国の調査参加登録者のうち，大学生 457 名を対象に，オンライン調査を実施した。分析対象は，大学入試で利用経験のある入試区分が不明な参加者を除いた 453 名（平均年齢 20.69 歳，*SD* = 1.67）であった。

2.2 調査内容

高大連携活動への参加　高校生の時に参加したことのある高大連携活動について,「大学を見学した」,「大学の研究室を訪問した」,「高校で大学教員による講義や実験・実習を受けた」,「大学の授業科目を大学生と受講した」,「大学が一般に公開する講座を受講した」,「大学が実施するオープンキャンパスに参加した」,「大学生･大学院生が実施する活動に参加した」,「GSC（グローバルサイエンスキャンパス）に参加した」,「SSH（スーパーサイエンスハイスクール），SGH（スーパーグローバルハイスクール），SELHi（スーパー・イングリッシュ･ランゲージ･ハイスクール），WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業, 地域との協働による高等学校教育改革推進事業, SPP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）等の高校と大学とが連携した取り組みに参加した」,「高校で実施した研究に対して，大学教員や学生から助言を受けた」,「大学教員がインターネット上で配信する講義を視聴した」,「大学図書館を利用した」,「大学が実施する高校生向けの教育プログラムに参加した」,「学会・学術集会に参加した」,「その他」,「いずれも参加しなかった」から該当するものをすべて選択するよう求めた。

最も印象に残った高大連携活動　高大連携活動参加経験者を対象に, 参加した活動のうち, 最も印象に残っている活動を一つ選択するよう求めた。

高大連携活動に対する価値評定　高校生版・課題価値測定尺度（伊田, 2003; 2004）の 24 項目を使用した。高大連携活動参加経験者を対象に，最も印象に残った活動を通して学んだ内容について,“当時のあなたの考えに近いものをひとつ選択してください”と教示し,「まったくあてはまらない（1）」,「あまりあてはまらない（2）」,「どちらかといえばあてはまらない（3）」,「どちらともいえない（4）」,「どちらかといえばあてはまる（5）」,「だいぶあてはまる（6）」,「非常にあてはまる（7）」の 7 件法で回答を求めた。

最も印象に残った活動の参加期間 [1)]　高大連携活動参加経験者を対象に，最も印象に残った活動の参加期間について,（ ）年間,（ ）か月間,（ ）日間の（ ）内に数値を記入するよう求めた。

進路選択・大学生活への影響　高大連携活動参加経験者を対象に，最も印象に残った活動の進路選択・大学生活への影響について尋ねるため，本研究で作成した 8 項目を用いた。“今振り返ると，その活動はあなたの進路選択や大学生活にどのような影響があったと思いますか。下記の項目についてどの程度あてはまるか，次の中から今のあなたの考えに近いものをひとつ選択してください。”と教示し，各項目に対して,「あてはまらない（1）」,「あまりあてはまらない（2）」,「どちらともいえない（3）」,「ややあてはまる（4）」,「あてはまる（5）」の 5 件法で回答を求めた。

活動への不参加理由　高校生の時に高大連携活動に参加しなかった者を対象に，不参加の理由について,「どのような活動があるか知らなかったから」,「予定があわなかったから」,「参加しやすい場所で実施されなかったから」,「参加することに不安があったから」,「関心がなかったから」,「他のことに時間を使いたいと思ったから」,「その他」から該当するものをすべて選択するよう求めた。

大学における主体的な学習態度　主体的な学習態度尺度（畑野・溝上，2013；畑野・原田，2014）の 9 項目を使用した。大学の授業に対する主体的な学習態度について，各項目に対して,「あてはまらない（1）」,「あまりあてはまらない（2）」,「どちらともいえない（3）」,「ややあてはまる（4）」,「あてはまる（5）」の 5 件法で回答を求めた。

大学生活への満足度　高橋･青木（2010）が作成し，奥村ほか（2019）が採択した大学生活満足度項目 5 項目を使用した。大学生活への満足度について，各項目

に対して，「あてはまらない（1）」，「あまりあてはまらない（2）」，「どちらともいえない（3）」，「ややあてはまる（4）」，「あてはまる（5）」の 5 件法で回答を求めた。

魅力的な高大連携活動 [2]　“高校生にとって，どんな「大学に関連する活動」があると魅力的だと思いますか。”と教示し，自由記述により回答を求めた。

属性　調査参加者の属性として，性別，学年，年齢，大学種別，専攻，大学入試で利用した入試区分，高校生の時の社会経済的地位，高校生の時の部活動の所属状況，高校生の時の居住地（都道府県）に関する情報を収集した。社会経済的地位については，石井ほか（2019）が作成した中学生用簡易版 SES 代替指標を用いた。家庭の所有物 3 項目について，“高校生の時，あなたの家には次のものはありましたか”と教示し，「いいえ（0）」，「はい（1）」の 2 件法で回答を求めた。高校生の時の部活動の所属状況については，「運動部に所属していた」，「文化部に所属していた」，「運動部と文化部の両方に所属していた」，「部活動に所属していなかった」，「その他」から該当するものを選択するよう求めた。社会経済的地位と部活動の所属の項目は，高大連携活動への参加や心理変数との関連を想定し，データを収集した。高校生の時の居住地については，高大連携活動への参加に関する地域差の情報を得るためデータを収集した。学校基本調査（文部科学省 , n.d.）の都道府県別の大学数（平成 30 年度から令和 4 年度の 5 年間の平均）のデータに基づき，都道府県を 3 つのグループに分類した。分類は，大学数が多い（第 1 四分位数より多い）都道府県（1 都 1 道 2 府 8 県，中央値 34.1），中間（第 3 四分位数以上第 1 四分位数以下）の県（25 県，中央値 9.0），少ない（第 3 四分位数より少ない）県（10 県，中央値 4.1）とした。

3 結果

3.1 属性

調査参加者の属性を表 1 に示した。

表 1 調査参加者の属性（n = 453）

	n	(%)		n	(%)
性別			利用した入試区分		
男性	181	(40.0)	一般選抜／一般入試	289	(63.8)
女性	264	(58.3)	学校推薦型選抜／推薦入試	146	(32.2)
回答しない	8	(1.8)	総合型選抜／ＡＯ入試	53	(11.7)
学年			高大連携活動への参加経験		
1 年生	120	(26.5)	あり	353	(77.9)
2 年生	108	(23.8)	なし	100	(22.1)
3 年生	114	(25.2)	社会経済的地位		
4 年生	111	(24.5)	0 点	169	(37.3)
大学種別			1 点	152	(33.6)
国立大学	108	(23.8)	2 点	89	(19.6)
公立大学	30	(6.6)	3 点	43	(9.5)
私立大学	315	(69.5)	部活動所属		
専攻			運動部所属	178	(39.3)
文系	245	(54.1)	文化部所属	181	(40.0)
文理融合系	103	(22.7)	運動部および文化部所属	4	(0.9)
理系	104	(23.0)	部活動に所属なし	90	(19.9)
その他	1	(0.2)	高校生時の居住地の大学数		
			多い	297	(65.6)
			中間	131	(28.9)
			少ない	25	(5.5)

3.2 高大連携活動の参加経験

学校推薦型選抜や総合型選抜の利用者は，一般選抜のみを利用する者に比べて，進路選択に向けて志望大学に関する情報を積極的に収集する傾向があると考えられる。大学入試で一般選抜のみを利用したか，学校推薦型選抜または総合型選抜を利用したかによって，高大連携活動への参加率が異なるかをχ^2 検定により検討した（表 2）。その結果，クラメルの連関係数 V は 0.12 であるが，学校推薦型選抜または総合型選抜を利用した者の方が，一般選抜のみを利用した者に比べて高大連携活動への参加率が有意に高いことが示された（$\chi^2(1) = 6.56, p < .05$）。

表 2 利用した入試区分と
高大連携活動への参加経験との関連

		利用した入試区分		計
		一般選抜のみ	学校推薦型選抜または総合型選抜	
高大連携活動	参加	193 (73.7%)	160 (83.8%)	353 (77.9%)
	不参加	69 (26.3%)	31 (16.2%)	100 (22.1%)
計		262 (100.0%)	191 (100.0%)	453 (100.0%)

次に，高大連携活動への内容に焦点をあてて，一般選抜のみの利用者と学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者とで分けて集計した結果を表 3 に示した。全体として「大学見学」,「オープンキャンパスへの参加」が 5 割以上と多くみられた。特に，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者では 6 割以上がこれらの活動に参加していた。一般選抜のみの利用者では，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者に比べて「SSH や WWL 等の高大連携活動への参加」が相対的に多かった。学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者では，一般選抜のみの利用者に比べて「大学教員によるインターネット配信講義の視聴」が相対的に多かった。

表 3 利用した入試区分別にみた参加経験のある高大連携活動（複数回答）と最も印象に残った活動（単一回答）

高大連携活動	一般選抜のみ利用				学校推薦型または総合型選抜を利用				計			
	参加経験のある活動		最も印象に残った活動		参加経験のある活動		最も印象に残った活動		参加経験のある活動		最も印象に残った活動	
	n	(%)	*n*	選択率(%)	*n*	(%)	*n*	選択率(%)	*n*	(%)	*n*	選択率(%)
大学見学	146	(55.73)	70	(47.95)	119	(62.30)	44	(36.97)	265	(58.50)	114	(43.02)
オープンキャンパス参加	118	(45.04)	90	(76.27)	120	(62.83)	101	(84.17)	238	(52.54)	191	(80.25)
高校で大学教員の講義等の受講	36	(13.74)	5	(13.89)	30	(15.71)	4	(13.33)	66	(14.57)	9	(13.64)
研究室訪問	20	(7.63)	4	(20.00)	10	(5.24)	0	(0.00)	30	(6.62)	4	(13.33)
大学の一般公開講座の受講	12	(4.58)	3	(25.00)	14	(7.33)	2	(14.29)	26	(5.74)	5	(19.23)
SSH や WWL 等の高大連携活動参加	21	(8.02)	4	(19.05)	5	(2.62)	0	(0.00)	26	(5.74)	4	(15.38)
大学図書館の利用	11	(4.20)	2	(18.18)	13	(6.81)	2	(15.38)	24	(5.30)	4	(16.67)
大学教員によるインターネット配信講義の視聴	8	(3.05)	1	(12.50)	14	(7.33)	1	(7.14)	22	(4.86)	2	(9.09)
大学の高校生対象教育プログラム参加	9	(3.44)	4	(44.44)	8	(4.19)	1	(12.50)	17	(3.75)	5	(29.41)
大学生・大学院生が実施する活動に参加	9	(3.44)	2	(22.22)	3	(1.57)	1	(33.33)	12	(2.65)	3	(25.00)
高校で行った研究について大学教員が助言	7	(2.67)	4	(57.14)	4	(2.09)	0	(0.00)	11	(2.43)	4	(36.36)
大学の授業科目の受講	3	(1.15)	1	(33.33)	6	(3.14)	1	(16.67)	9	(1.99)	2	(22.22)
学会参加	3	(1.15)	1	(33.33)	2	(1.05)	1	(50.00)	5	(1.10)	2	(40.00)
GSC 参加	2	(0.76)	0	(0.00)	2	(1.05)	1	(50.00)	4	(0.88)	1	(25.00)
その他	3	(1.15)	2	(66.67)	1	(0.52)	1	(100.00)	4	(0.88)	3	(75.00)
いずれも参加なし	69	(26.34)	—	—	31	(16.23)	—	—	100	(22.08)	—	—

注）表中の「選択率」は，各活動における「参加経験のある活動」の人数に対する「最も印象に残った活動」の人数の割合を指す。

また，個々の取り組みによって内容は異なるが，高校生の時に大学の研究に携わるような高大連携活動に参加した者は相対的に少ないことが窺えた。

参加した活動のうち最も印象に残った活動として，「オープンキャンパスへの参加」を挙げる者が最も多かった（参加経験のある 238 名中 191 名が選択：選択率 80.25%）。参加経験者数が最多であった「大学見学」の選択率は 43.02% であった。その他，「高校で行った研究に大学教員が助言する」活動や「大学が実施する高校生対象の教育プログラムへの参加」，「学会への参加」の選択率が 3-4 割程度であり，これらは印象に残る活動として認識されやすいことが示唆された（表 3）。

続いて，高校生の時に高大連携活動に参加しなかった理由を表 4 に示した。不参加者の 3 割が「関心がなかったから」，「他のことに時間を使いたいと思ったから」を選択していた。参加したいが参加できなかったというよりも，本人の意思で参加しなかった者が相対的に多いことが示唆された。

表 4 高大連携活動への不参加理由（複数回答）

	n	(%)
関心がなかったから	34	(34.0)
他のことに時間を使いたいと思ったから	31	(31.0)
どのような活動があるか知らなかったから	17	(17.0)
予定があわなかったから	17	(17.0)
参加しやすい場所で実施されなかったから	11	(11.0)
参加することに不安があったから	7	(7.0)
その他	5	(5.0)

次に，高校生の時の居住地と高大連携活動への参加経験との関連を調べるため，居住していた都道府県内の大学数の多さによって高大連携活動への参加率が異なるかを χ^2 検定により検討した（表 5）。その結果，有意差はみられなかった（$\chi^2(2) = .68, p = .72, V = .04$）。また，活動参加経験者において，居住していた都道府県内の大学数の多さと参加した活動の種類の数との有意な関連もみられなかった（$F\ (2, 350) = .97, p = .38, \omega^2 = .00$）（表 6）。

表 5 高校時の居住地と高大連携活動への参加経験

	高校時の居住地の大学数			計
	少ない	中間	多い	
参加	18 (72.0%)	104 (79.4%)	231 (77.8%)	353 (77.9%)
不参加	7 (28.0%)	27 (20.6%)	66 (22.2%)	100 (22.1%)
計	25 (100.0%)	131 (100.0%)	297 (100.0%)	453 (100.0%)

表 6 高大連携活動の参加経験者における高校時の居住地と参加した活動の種類の数（平均と *SD* ）

	高校時の居住地の大学数			計
	少ない	中間	多い	
n	18	104	231	353
M	2.33	2.01	2.20	2.15
SD	0.91	1.23	1.34	1.29

3.3 尺度の構成

進路選択・大学生活への影響　8 項目について，探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った結果，2 項目については共通性の値および項目間の相関が低かった。そのため，当該 2 項目を除外した 6 項目について，同様の手続きで探索的因子分析を行った。MAP により最小因子数を確認し，1 因子解を採用した（表 7）。信頼性係数は α = .83 であり，十分な内的整合性が示された。

高大連携活動に対する価値評定　伊田（2004）による下位尺度構成に基づき，5 因子 24 項目を採用した。下位尺度は先行研究より「学業・制度的利用価値」,「興味価値」,「実践的利用価値」,「公的獲得価値」,「私的獲得価値」とした。信頼性係数は α = .91―.93 といずれも十分な内的整合性が示された。

大学における主体的な学習態度　畑野・溝上（2013）を参考に，1 因子 9 項目を採用した。信頼性係数は α = .90 と十分な内的整合性が示された。

大学生活への満足度　奥村ほか（2019）を参考に，1 因子 5 項目を採用した。信頼性係数は α = .89 と十分な内的整合性が示された。

分析においては，各尺度の加算平均得点を尺度得点として用いた。

3.4 基本統計量

表 8 に各尺度の記述統計量（平均，標準偏差，範囲）と信頼性係数，変数間の相関係数を示した。利用した入試区分については，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者は 1，一般選抜のみの利用者は 0 として得点化した。部活動所属の有無，高大連携活動への参加の有無については，1（有），0（無）として得点化した。これらの変数に関してはスピアマンの順位相関係数，その他の変数に関してはピアソンの積率相関係数を算出した。その結果，進路選択・大学生活への影響，高大連携活動に対する価値評定，大学における主体的な学習態度，大学生活への満足度においては，すべての指標間で有意な正の相関を示していた。高大連携活動に対する 5 つそれぞれの価値について，高く評価しているほど，進路選択・大学生活への影響があったと認識し，主体的な学習態度が高く，また大学生活満足度が高いことが示された。また，高大連携活動に参加した者ほど，高校時の社会経済的地位が高く，部活動に所属しており，また大学での主体的な学習態度が低いことが示された [3)]。そして，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者ほど，社会経済的地位が低く，高大連携活動に参加しており，進路選択・大学生活への影響を低く認識しており，主体的な学習態度が低いことが示された [4)]。また，部活動に所属している者ほど学業・制度的利用価値，興味価値を低く評価していることが示された。

表 7 進路選択・大学生活への影響の因子分析結果

番号	項目	因子負荷量	共通性	*M*	*SD*
2	当時の活動で関心をもったことが現在の関心とつながっている	.77	.59	2.65	1.15
6	当時の活動は，大学での授業の履修に影響している	.74	.54	3.01	1.19
7	当時の活動は，現在，大学で取り組んでいる研究内容に影響している	.71	.50	3.12	1.19
5	当時の活動は，大学受験前の学部・学科選びに役立った	.71	.50	2.32	1.11
4	当時の活動は，大学受験前の志望校選びに役立った	.61	.37	2.31	1.12
1	当時の活動で得た大学のイメージは，現在の大学生活と近い	.54	.29	2.96	1.12
	因子寄与	2.79			
	寄与率	46.40			
	内的整合性（α）	.83			

表 8 各変数の記述統計量，信頼性係数，相関係数

	M	*SD*	範囲	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 年齢	20.69	1.67	18-28	—												
2. 利用した入試区分（0 = 一般のみ，1 = 推薦または総合）	.42	.49	0-1	—	-.15 **											
3. 部活動所属（0 = 無，1 = 有）	.80	.40	0-1	—	-.10 *	.01										
4. 社会経済的地位	1.01	.98	0-3	—	.02	-.13 **	.11 *									
5. 高大連携活動への参加（0 = 無, 1 = 有）	.78	.42	0-1	—	-.03	.12 *	.18 **	.16 **								
6. 学業・制度的利用価値	3.28	1.26	1-7	.91	.00	-.09	-.11 *	-.03	—							
7. 興味価値	2.92	1.33	1-7	.93	-.04	-.04	-.11 *	-.06	—	.76 **						
8. 実践的利用価値	3.51	1.40	1-7	.92	-.01	-.06	-.08	-.06	—	.84 **	.72 **					
9. 公的獲得価値	3.64	1.37	1-7	.92	.01	-.07	-.05	-.08	—	.76 **	.65 **	.79 **				
10. 私的獲得価値	3.48	1.32	1-7	.91	.00	-.04	-.09	-.08	—	.83 **	.76 **	.90 **	.79 **			
11. 進路選択・大学生活への影響	2.73	.85	1-5	.83	-.08	-.13 *	-.02	-.05	—	.58 **	.54 **	.48 **	.42 **	.50 **		
12. 主体的な学習態度	2.67	.79	1-5	.90	-.03	-.11 *	-.09	-.07	-.17 **	.19 **	.30 **	.18 **	.11 *	.16 **	.27 **	
13. 大学生活満足度	2.79	.96	1-5	.89	.00	-.03	-.09	-.05	-.04	.24 **	.19 **	.21 **	.16 **	.22 **	.50 **	.12 **

注）利用した入試区分，部活動所属，高大連携活動への参加についてはスピアマンの順位相関分析を行った。その他の変数についてはピアソンの積率相関分析を行った。
n = 353~453
**$p < .01$, *$p < .05$

3.5 高大連携活動に対する価値評定と進路選択・大学生活への影響，大学における主体的な学習態度，大学生活への満足度の関連

一般選抜のみの利用者と，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者とで分けて，高大連携活動に対する価値と進路選択・大学生活への影響，大学における主体的な学習態度，大学生活への満足度との相関係数を算出した。単相関分析の結果，学校推薦型選抜または総合型選抜利用者においては，進路選択・大学生活への影響と大学生活満足度に関して，5 つの価値すべてと有意な正の相関関係がみられた。主体的な学習態度については，興味価値との間にのみ有意な正の相関関係がみられた（表 9）。一般選抜のみの利用者においては，進路選択・大学生活への影響と主体的な学習態度に関しては，5 つの価値すべてと有意な正の相関関係がみられた。大学生活満足度については，公的獲得価値以外の 4 つの価値と有意な正の相関関係がみられた（表 10）。

高大連携活動に対する価値評定尺度の各下位尺度間に高い相関関係があることを考慮し，価値評定尺度の他の下位尺度を統制し，偏相関分析を行った。その結果，学校推薦型選抜または総合型選抜利用者においては，学業・制度的利用価値は，進路選択・大学生活への影響と有意な正の相関がみられた。興味価値は進路選択・大学生活への影響，主体的な学習態度との間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。大学生活満足度については，5 つの価値と有意な相関はみられなかった（表 9）。一般選抜のみの利用者においては，学業・制度的利用価値と進路選択・大学生活への影響との間と，興味価値と主体的な学習態度との間に，それぞれ有意な正の相関がみられた。大学生活満足度については，5 つの価値と有意な相関はみられなかった（表 10）。

表 9 学校推薦型選抜または総合型選抜利用者の相関・偏相関分析の結果

	進路選択・大学生活への影響		主体的な学習態度		大学生活満足度	
	r	*pr*	*r*	*pr*	*r*	*pr*
学業・制度的利用価値	.57 **	.23 **	.15	.10	.29 **	.10
興味価値	.59 **	.34 **	.21 **	.21 **	.23 **	.05
実践的利用価値	.51 **	.10	.10	.05	.29 **	.10
公的獲得価値	.40 **	-.09	.00	-.14	.19 *	-.06
私的獲得価値	.50 **	-.07	.07	-.10	.25 **	-.02

注）偏相関分析では課題価値尺度の他の下位尺度を統制した。
n = 153
**$p < .01$, *$p < .05$

表 10 一般選抜のみ利用者の相関・偏相関分析の結果

	進路選択・大学生活への影響		主体的な学習態度		大学生活満足度	
	r	*pr*	*r*	*pr*	*r*	*pr*
学業・制度的利用価値	.57 **	.31 **	.21 **	-.09	.20 **	.12
興味価値	.49 **	.07	.35 **	.31 **	.15 *	-.02
実践的利用価値	.46 **	-.14	.22 **	.06	.15 *	-.09
公的獲得価値	.42 **	-.04	.17 *	-.03	.13	-.04
私的獲得価値	.50 **	.10	.20 **	-.06	.19 **	.10

注）偏相関分析では課題価値尺度の他の下位尺度を統制した。
n = 186
**$p < .01$, *$p < .05$

4 考察

本研究では，高校時の高大連携活動の参加経験状況と，最も印象に残っている高大連携活動に対する価値評定と大学生活の認識との関連について，大学生を対象にオンライン調査を実施し検討した。

3.2 節では，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者は一般選抜のみの利用者と比べて高大連携活動への参加率が高いことが示された。学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者は，高校で一斉に参加する活動だけでなく，個人で大学の教育や研究に関する情報をより積極的に収集しようとする姿勢が見受けられる。

また，高大連携活動の内容に関して，調査参加者の多くが「大学見学」と「オープンキャンパス」に参加しており，大学の研究に携わる活動に参加した者は相対的に少ないことが示された。

高大連携活動への参加に関する地域差については，本研究ではとらえることができなかった。近年，様々な事業でオンライン化が導入されたことの影響も考えられる。一方で，高校生の時に住んでいた都道府県という指標が現状を捉える上で適切でなかった可能性も考えられる。

3.5 節では，入試区分によらず5つの価値と進路選択・大学生活への影響とは相互に関連があるものの，偏相関分析の結果，学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者では，特に学業・制度的利用価値と興味価値が進路選択・大学生活への影響と関連が強く，一般選抜のみの利用者では，特に学業・制度的利用価値が進路選択・大学生活への影響と関連が強いことが示された。学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者においては，入試や進学後の明確な有用性に限らず，内的に駆り立てられるおもしろさや楽しさも含め，より幅広い価値づけが後に影響をもたらす可能性がある。受験で学校推薦型選抜または総合型選抜を利用した場合と，一般選抜のみを利用した場合とでは，受験準備にあたり自身の志願動機と向き合う機会や出願先の決定過程等が異なっていた可能性が考えられる。そのため，入試区分によって，高大連携活動に対する価値づけと進路選択・現在の大学生活への影響の認識との関連の仕方が異なっていたと考えられる。

また，利用した入試区分によらず，興味価値と主体的な学習態度との間に有意な正の相関がみられた。参加した活動が充実感や満足感を喚起する内容であると感じることは，大学での主体的な学習態度と関連することが示された。

高大連携活動への各価値評定と大学生活満足度との関連については，利用した入試区分によらず，概ね単相関は有意であるが，偏相関は有意でなかった。先行研究では，高校時の進路選択における自己決定の高さが大学入学後の満足度に影響することが明らかにされている（奥村ほか, 2019）。高大連携活動への価値評定が進路選択における自己決定を促す要因として機能することで，大学生活満足を高める可能性も考えられる。

以上より，高大連携活動を組織する際に，受験生のニーズとして入試や進学後の学びへの有用性を意識することに加え，活動への取り組みにより生徒が楽しさや満足感を得ることができるという観点から検討を行うことが，後の大学生活の支援にも結びつく可能性が示唆された。また，活動を通じて進路選択への自己決定を促す上で，活動内容を後から振り返り，自身の関心や希望するキャリアとどのように関わりがあるかを整理する機会を設けることも有用であると考えられる。

なお，特に学校推薦型選抜や総合型選抜は，大学によって入試難易度や選抜において捉える学力，大学の経営方針等が異なることから多様な内容を含む。本研究では，その点を踏まえた検討を十分に行うことができなかった。今後，調査対象者の学力水準や各大学の選抜のコンセプト等を考慮した調査を実施し，より精緻な分析と考察を行うことが望まれる。

注

1）最も印象に残った活動の参加期間については，たとえば，1年に一度，1日間で実施される活動に3年間（3回）参加した場合に，調査参加者によって「3日間」と回答する者と「3年間」と回答する者が混在していた可能性が高く，正確な情報が得られていないことから本項目は分析から除外した。

2）紙面の都合上，本稿では分析結果の報告を割愛した。

3）「高大連携活動に参加した者ほど，大学での主体的な学習態度が低い」という結果に関しては，次の可能性が考えられる。表3より，参加経験者が多かった「大学見学」,「オープンキャンパスの参加」,「高校で大学教員の講義等の受講」等の各活動については，本人が主体的に参加を決めたケースに加え，本人の意思とは別に，高校の教育的働きかけに対して受け身的に参加したケースも多く含まれると考えられる。一方で，高大連携活動に参加経験のない者は，うち59.0% がその不参加理由として「関心がなかった」または「他のことに時間を使いたかった」を選択しており，本人の意思で参加しないことを選んだ者が多かったことが窺える。本研究でとり上げた「主体的な学習態度」は，単位や卒業のためだけでなく，自らの成長のために授業・授業で

出される課題に主体的に取り組もうとする学習態度を指す（畑野・溝上, 2013）。本結果については，高大連携活動に参加するだけでは十分でなく，自分で行動を選びとる意思の強さが大学での主体的な学習態度と関連する可能性を示唆しているとも考えられる。詳細については今後の検討が必要である。

4)「学校推薦型選抜または総合型選抜の利用者ほど，主体的な学習態度が低い」という結果に関しては，調査対象者の学力水準や各大学の選抜のコンセプト等を考慮して分析を行うことで，詳細な検討が可能になると考えられる。

参考文献

中央教育審議会（1999 年 12 月 16 日）.「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm（2023 年 8 月 23 日）.

中央教育審議会（2016 年 12 月 21 日）.「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（2023 年 8 月 24 日）.

Eccles, J., and Wigfield, A. (1985). Teacher expectancies and student motivation. In J. B. Dusek (Ed.), *Teacher expectancies* (pp. 185-226). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

畑野快・溝上慎一（2013）.「大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討」『日本教育工学会論文誌』**37**，13-21.

畑野快・原田新（2014）.「大学生の主体的な学習を促す心理的要因としてのアイデンティティと内発的動機づけ：心理社会的自己同一性に着目して」『発達心理学研究』**25**，67-75.

伊田勝憲（2001）.「課題価値評定尺度作成の試み」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』**48**，83-95.

伊田勝憲（2003）.「教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討：自我同一性，達成動機，職業レディネスと課題価値評定との関連から」『教育心理学研究』**51**，367-377.

伊田勝憲（2004）.「高校生版・課題価値測定尺度の妥当性検討：自意識および達成動機との関連から」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』**51**，117-125.

石井僚・村山航・福住紀明・石川信一・大谷和大・榊美知子・鈴木高志・田中あゆみ（2019）.「家庭の所有物を用いた中学生用簡易版社会経済的地位代替指標の作成」『心理学研究』**90**，493-502.

板倉孝信・岡村郁子・河西奈保子（2023）.「探究と留学に関する夏季オンライン特別講演：コロナ禍の高校生を応援するための取り組み」『大学入試研究ジャーナル』**33**，155-162.

文部科学省（2023 年 3 月）.「中学校・高等学校キャリア教育の手引き―中学校・高等学校学習指導要領（平成 29 年・30 年告示）準拠― 第 4 章　高等学校におけるキャリア教育」文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20230626-mxt_jidou01-000030273_1.pdf（2023 年 8 月 24 日）

文部科学省（n.d.）.「学校基本調査」文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm（2023 年 4 月 20 日）

西郡大（2015）.「キャリア教育からみた出前講義の効果と限界：普通科高校のキャリア教育に高大連携活動をどのように位置づけるか」『Journal of Quality Education』**7**，65-79.

西郡大・竜田徹・山内一祥・福井寿雄・髙森裕美子・園田泰正・兒玉浩明（2018）.「継続・育成型高大連携活動カリキュラムの開発と実施：完成年度を迎えた「教師へのとびら」の効果と課題」『大学入試研究ジャーナル』**28**，147-153.

奥村弥生・森田愛望・青木多寿子（2019）.「大学進学時の進路選択における親の関与と進学後の自立および適応との関連」『心理学研究』**90**，419-425.

大久保貢・四谷淳子・中切正人・田中幸治（2023）.「高大連携探究プロジェクトと高大接続型選抜試験の開発：福井大学医学部看護学科の事例」『大学入試研究ジャーナル』**33**，19-25.

大野真理子・河西奈保子・溝口侑（2021）.「高大連携活動が高校生に与える影響について：「都立高校生のための先端研究フォーラム」の事例をもとに」『大学入試研究ジャーナル』**31**，49-55.

高橋智子・青木多寿子　(2010).「児童期からの適応感を測定できる生活充実感尺度の開発：適応感研究の相互比較を可能にする尺度をめざして」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部』**59**，69-77.

山田恭子・高山千利・清水千草・田﨑優里・浦崎直光（2023）.「医学部志望者を対象とした高大接続事業「医学部体験授業」の実施と成果」『大学入試研究ジャーナル』**33**，100-105.